

---

# 旋律の彼方

華浅葱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旋律の彼方

### 【Nコード】

N2700E

### 【作者名】

華浅葱

### 【あらすじ】

「遠くから応援してるから」その言葉が持つ意味を少女自身まだ知らなかった。自分が奏でる音が誰かを救うと知ったとき、時空を超えた世界で少女は自嘲気味に笑った。また誰かを傷つけるのかと…。愛されるべき音を失った少女に、異世界は何を求めるのか。

## 0 . 残音

### 0 . 残音

愛音は夢を見ていた。

真つ白いその世界には3年前に交通事故で亡くなってしまった父・信吾が居て、幼い…5歳くらいの愛音と一緒にピアノを奏でている。そしてその後ろには…もう長い間声さえ聞いていない母、加奈子が微笑みを浮かべて佇んでいた。

真つ白い世界の中にあってもピアノの鍵盤はキラキラと輝き、信吾と愛音が生み出す音達はこの家族を優しく包み込んで遠くへ消えて行つた。

愛音が疲れたと訴えると、父と同じように自身も音楽家の母は「しょうがないわね」と笑って少女の横に座る。ギユウギユウになって3人で座った黒い椅子。「おいそんなに押すなよ」と言う信吾は笑っていた。そして愛音や加奈子もそれにつられて声を出して笑い合う。

両親の連弾を聴きたいが為についた小さな嘘。

全てが懐かしくて、愛音の心が揺れ始める。

微笑む父に、母に、そして幼い自分に「どうして」と少女は問わなかった。

過去の幻想に問うたとして決して答えなど得られないことを理解する程には、少女は成長していたから。しかし旋律が消えると共に生まれた歪みを直す方法を知らない少女はいまだに幼く、それを自覚する彼女は静かに顔を曇らせた。

心が揺れる。

揺れて、揺れて、何かが崩れる前に目を覚まさなければ。

2008/5/12 |

## 1・擬音

辺りがすっかり暗くなった午後5時の第一音楽室。器楽部が新校舎の音楽室に活動の拠点を移したため、今そこには小柄な少女しか居ない。

老朽化にともない取り壊しが決まった木造の旧校舎からは既に机や椅子などは運び出されており、この音楽室にもグランドピアノが残されるのみであった。もっとも来週になればピアノも新校舎に運ばれる予定で、そうなれば長年壁に貼られて色あせた校歌の歌詞などがもの寂しくも存在感を増すことだろう。なんとも閑散とした校舎内に響いていた澄んだピアノの音は遠くから聞こえて来たチャイムを合図に止んだ。それに代わるかのように響いて来た足音に、少女は一瞬その息を詰める。

ああ、とうとうバレてしまったのだ。

まるでなにかを願うかのようなにぎゅっと目を瞑る少女。そして再び彼女の瞳が開いたとき、そこにはもう迷いは無かった。

「おい、愛音っ！お前塔音受けないって本当か！」

音楽室のドアをまるで蹴破らんばかりに開け、室内に乱入して来たのは少女・愛音の幼なじみの貴哉たかやであった。この怒れる少年は折角の端麗な眉間に深々と皺をきざみ怒鳴ったが、目の前の少女は彼を一瞥しただけでそれを受け流す。貴哉に乱暴に扱われた旧校舎の名残である音楽室の木製のドアは、まるで彼を非難するかのよう

甲高い音を立てて閉まっていく。古い造りのためきちんと閉まりきらないのはまあごく愛嬌だ。

「タツちゃん、扉壊れちゃうよ」

「話しを逸らすなよな！」

貴哉は眉間の皺を更に深くさせながらズンズンとピアノの前に座る愛音に近づく。最近めつきり身長も伸びて来た貴哉の剣幕はなかなかの迫力があつたが、さすがは幼なじみ…愛理は「別に逸らしてないよ」と言いながら目の前の楽譜の片付けを再開する。そんな態度に焦れたように少年は楽譜を少女から奪うと再び声を荒げた。

「塔音受けないって…光陵の特待受かつたって本当か!？」

「うん。それより楽譜返して」

意外にもあつさりと事実を認めた愛音に、貴哉は二の句が継げない。

「タツちゃん。楽譜、返して」

一度目よりもやや強めに、そしてゆっくりと言われ、貴哉はビクリと肩を揺らし握っていた楽譜を思わず差し出してしまふ。

「……………」

また、あの目だ…。

貴哉はいつ頃からか愛理が時折向けてくるようになった静かな瞳がとても苦手だった。

人当たりはいいが基本的に大人しい性格の愛理は、童顔なのも相俟って普段は実年齢よりも幼く見える。しかしこの暗い視線を投げ

かけてくる時の少女は自分と同じ歳であるはずなのに、はるか年上に思えて落ち着かないのである。

「ありがとう」

受けとった楽譜を鞆に入れると、愛音は貴哉の横を通り過ぎた。

「なんで…」

それ以上言葉を続けることが出来ない少年に、愛音はそつと苦笑する。

「あの人が許す訳ないでしょう。私立で…しかも音楽の高校なんて「前におばさんには話をつけたって言ってただろ！？なんで今になつて…」

「あの人とは…母さんとは始めから話し合ってたんじゃないよ」

「というか去年から音信不通だし…」とさらりと言つ愛音にもその言葉の内容に貴哉は絶句する。

「元々義務教育が終わったら縁切るってあの人の口癖、タツちゃんも知ってるよね。自費で高校に行くには学生寮があつて、生活費・学費全額免除の特待制度がある光陵がいいの」

「そんな…。お前、この頃毎日放課後ピアノ弾いてたじゃんか…」

塔音の実技のための練習じゃなかったのか？と問いかける貴哉に、俯いた少女が微笑に笑うような音が聞こえたが、長い髪の所為で表情までは分からない。

「これはね、弾き納めなの」

「弾き納め…？」

不吉な言葉に、貴哉の背筋に嫌な汗が流れる。

「私、ピアノを捨てるの」

そう言ってようやく見えた少女の瞳はやはり貴哉の苦手な色をしていた。

「卒業したら、タツちゃんともお別れだね」

「愛…音……」

「タツちゃんなら塔音受かるよ。遠くから応援してるから頑張ってる」

言外に少女は“もう会わない”と少年に伝えていた。

事実、貴哉はその日を最後に愛音に会うことはなかった。

遠くから応援してるから…。

その言葉が持つ意味を、今は愛音自身も知らない。

2008 / 05 / 13

## 2・葉音

「ん…」

頬に何か冷たい何かを感じ、愛音は目を覚ました。木漏れ日が寝起きの…光にまだ慣れていない瞳を刺激し、少女は思わず目を細める。視界に入る全てがキラキラと輝いて見えるのは、草木がしつとりと朝露に濡れているからだろう。愛音の頬に伝うのも、白い可憐な華の花弁から伝い落ちた雫であった。仄かに甘い香りを放つその華を指で優しく突くと、また透明な雫が零れる。

（森に来るのなんて本当に久しぶり…。お父さんが死んでしまっ  
て以来かな…）

ぼんやりとそう考えていた愛音であったが、次の瞬間目を見開いて上体を起こした。

「も、森!?!」

彼女の性急な動きと叫びに近い声に驚いたように、小鳥達がいっせいに飛び立つ。

「森!?!」

いつも落ち着いている少女には珍しく、混乱したようにもう一度声を上げた。右を見ても左を見ても木、木、木…。そして地面には一面の白い華。

それは、ありえない状況であった。

確かに愛音が住むアパートから電車に乗って1時間もすればこの

ように豊かな森に辿り着けるかもしれない。しかし今まで試みたこととすらない冒険をまさか制服に上履き姿という格好で無意識のうちにやり遂げたとは考えにくい。

「昨日タツちゃんと音楽室で話して…それから家に帰ろうとして…あれ？」

幼なじみと別れた後の記憶が浮かんで来ないことへの違和感に、愛音は眉間に皺を寄せた。「誘拐」という選択肢が頭をよぎったが、安アパートに一人で住む自分を攫って一体誰が得をするというのだろう。そう思つて頭を切り替えようとした彼女の脳裏を、一人の女性の顔が掠める。

「……………」

己が消えて喜ぶ存在を認識し、愛音は自分の心がしんと冷たくなつていくのを自覚した。

「…まずは街を探さなきゃ」

ぼそりとそう呟きに似た声が聞こえたのは、すぐのこと。

遠くに落ちていた学生鞆を大事そうに胸に抱くと、少女は歩き始めたのだった。

2008/05/22

### 3・風声

中学校指定の冬服で目覚めた愛音は、真冬であるはずなのにまるで初夏のような気候の所為で今では白のシャツに体育用の長ズボンという出で立ちであった。若干ミスマッチな組み合わせだったが、動きやすさを考えればスカートよりも断然こっちの方が良い。もともと着ていた濃紺のブレザー等は元々体育服を入れていた桃色の袋に押し込まれており、入りきらなかったマフラーの端が少女が歩く度にフラフラと揺れている。

「絶対に皺になってるよお」

パンパンに膨れた袋を再び開けるのが怖い。クリーニング代の事を考えると頭が痛い、今は歩くことに集中しようと自分に何度言い聞かせたことだろう…。

白い花畑を抜け、道無き道を歩き始めてかなりの時間が経っていた。休憩を挟みつつではあったが、愛音は明けて間もなかった日が反対側に沈む程は歩き続けている。しかし、オレンジ色に染まる視界の先にはいまだに街どころか一人見当たらず、ただただ鬱蒼と繁る木々達だけが少女を見下ろしていた。

もともと帰宅部なうえに体力も体の細さに比例して低い彼女がこんなにも長時間歩き続けられたのは…

「この歌のおかげ…だよね…」

森のどこかから聞こえてくる歌…いや旋律が愛音の疲労を和らげ

ているとしか考えられなかった。初めは気にも止めなかったが、この今もまるで愛音を包み込むように奏でられる音達が無ければ微かな疲労程度でここまで動き続けることは不可能だっただろう。

しかし、愛音は疲労とは違う原因でその歩みを止めようとしていた。

その理由は単純に“空腹”と“気力の限界”であった。

「お腹減ったな…」

優しい旋律は胃までは満たしてくれないらしく、ブレザーのポケットに奇跡的に入っていた小粒のチョコレートだけで昼を凌いだ少女の空腹感は限界まで高まっていた。空腹感に合わせて少女の気力も底をつき始めていた。

「これだけ歩いて街どころか人さえ見えないなんて、ここ本当に日本じゃないのかも…」

己が今在る世界への疑問。

その疑問はもはや確信に限りなく近くなっている。

補足として明記しておくが、育った環境のせいも愛理はその他の子供よりも現実主義者である。否定はしないがファンタジーな世界は単なるお伽噺か、特別な能力を持った人々限定のものだと信じていた。ちなみに靈感など持たない愛音はもれなく後記の条件にも当てはまらない。そんな彼女が非現実的な咳きを漏らす理由はさつきから視界の端をひらりひらりと飛ぶ乳白色の存在である。

「精霊…っていつのかな？」

歩き始めてからすぐに近距離で対面した時、声にならない叫びを

愛音があげたためか、必要以上に近寄らなくなった大小・形態様々な“精霊”達は日本…地球で一度もお目にかかったことの無い代物だった。

となると、ここは異世界か？そう仮定付ければ全てが符合する。

自分がいきなり森に居たこと。

気候の急激な変化。

少女を遠くから見詰める“精霊”達。

黄金の小鳥。

薄水色の鹿。

三つ又の尾を持つ兎。

全てが少女が15年間生きて来た世界にはないものだった。

そして、真剣な事を考える思考の端で彼女は思う。

「あれが光ってなかったら食べたのになあ…」

淡く発光する木の実を見てそう呟く少女は、外見に似合わず逞しかった。

3・風声（後書き）

やっと物語が動き始めましたー（汗）

#### 4・濁音

「あつ、……家だ!!」

空腹を叫ぶ胃袋を宥めつつ光る木の実に恨めしげな言葉をもらしてから更に一時間経ったとき、愛音はついに家らしき物を見つけた。

辺りはすっかり薄暗くなっており、食べれはしなかったが灯りの代わりとしてハンカチで作った簡易の袋にいっぱい詰めた。詰めたままの光る木の実が放つ仄かな光を頼りに少女は駆出した。途中で木の根につまずきながらも、なんとか転倒せずにドアの前まで辿り着く。

そのとき、少女はようやく家だと思っていたそれがただの小屋だったことに気付いた。

少々の落胆はこのさい無視せねばなるまい。

以前は狩人らが仮眠の場所として使っていたであろう木造の小屋は、なかなかしつかりした造りであった。しかし長年放置されたためか外壁は蔦で覆われてしまっている。

はたしてここに人はいるのか…。

銀色の光をかざしてみれば、ごく最近のうちに絡みついていた蔦が千切られ、扉が開閉された形跡がある。かすかに香ってくる青臭い匂いも少女の予想を肯定している。

愛音は逸る気を抑えて控えめに唯一蔦に覆われていないドアをノックした。

「誰か、いらつしゃいませんか？」

再三の呼びかけにも反応が返ってこなかったことにまた落胆しつつも、もしかしたらもう寝ているのかもしれないと、愛音は錆びたノブを回して室内に足を踏み入れた。

「お邪魔します」と言ってしまうのは日本人の本能のようなものだ。

シンと静まった室内は正面から見た時よりも奥に広いらしく、漆黒の闇に包まれた先は木の実の仄かな銀色の光などでは到底晒しだされはしない。

「…誰か、…いらつしゃいませんか？」

恐る恐るだされた問いかけには、深すぎる闇への恐怖が滲み出ていた。

そんな時に奥から「うう…」と低いうめき声が聞こえて来たものだから、愛音は手に持っていたハンカチを落としてしまう。

「…っ！…！」

乾いた音を立てて木の実が床を転がっていく。

ころころと転がっていく木の実が何かに当って止まった。

「あ、あの…」

体の震えをリアルに感じながらも、愛音は闇に向って声をかける。

「勝手に入ってしまったって…す、すみません。わ、私森で迷って…」

まるで道しるべのように点々と転がっている木の実の間を必死に歩いていた白い…今では土に汚れてしまった学校指定の上履きの動きが唐突に止まる。

木の実の動きを止めた存在が、銀色の光によってその正体を現した。

淡い木の実の光が霞むほどの白銀の髪の毛、長いそれに縁取られた顔は、あの端正な顔の幼なじみを見慣れている愛理でさえも息をのむ程鋭く精悍に整っていた。瞳の色は分からない。なぜならその双眸は苦しげに閉じられているからだ。

「血が…」

愛音は小さく悲鳴を漏らす。

銀の美丈夫は血で濡れていた。

#### 4・濁音（後書き）

久しぶりの更新です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2700e/>

---

旋律の彼方

2011年2月2日02時18分発行